

分会の組織状況や職場実態が明らかに 拡大分会長会議開催

1時間30分の短時間開催

8月27日(土)
13:00より国
労千葉地本会議室
において拡大分会
長会議が開催され
た。当日は新型コ



ロナ第7波による感染防止対策を考慮しながら短時間での開催とし、越川副委員長の司会で進行された。千葉地本を代表し、加藤委員長より「国労の組織状況は非常に厳しい状況。3年後の組織ビジョンについて分会でしっかり議論してほしい。分会再編について地本の考えを勧めるが、その考えを分会に持ちかえって是非、9月23日(金)に予定している地本定期大会に向けて議論し、肉付けをしてほしい。10月には会社の組織再編がされるが、職場では若い仲間を中心に会社側のやり方に不満を持つ人も。その人に対して国労が率先して受け皿になれるような労働運動を構築すべきだ」と挨拶された。その後は議題に入り、北嶋書記長よりこの間における取り組みの経過や課題について述べたが、やはりネックとなったのが分会再編であった。

寺林分会長が職場実態・組織について発言する

8月で西船橋保線技術センターの職場実態について「当技セの線路科が13名から2名減。1人は千葉施設指令へ転勤。もう1人は計画科へと異動となり、11名となったが補充がない。3年前は17名の要員だったが減らされる一方でベテラン社員がいなくなり、職場は超勤が日常化している。コロナ禍で収益が落ち、修繕費も削られているのに『超勤はなるだけしないように』という人は誰もいない。会社側に『早急に人を増やせ』と工務協に問題を上げながら改善していく」と発言した。組織再編の問題については「新小岩保線分

会は5年前に組織が減少する中、旧新小岩保線分会と旧西船橋保線分会が2018年2月に1つとなって新たな新小岩保線分会を結成させた。この間に月1回の執行委員会や『新保ニュース』を発行し、旅行などのレクを開催しながら組織強化に向けた具体的な行動を取り組んだ」と分会を再編した経緯について述べた。更には「この4年で新たな分会を結成させた頃は29名だったが、現在は15名と半減。JRの現役が1名だけで後の14名はエルダーとなり、3分の2が工務職場を離れて警備や物流の出向職場で活躍している。今後どのようにして分会運動を継続させていくのか？大きな課題である」と発言した。また他の工務職場からも組織再編について同じような発言がされた。



新小岩保線分会は新たな 「千葉設備分会」設立に向けた

分会再編成について「新小岩保線分会」は1つで、千葉保線・千葉建築・千葉土木の各分会に千葉電気分会を入れた「千葉設備分会」。木更津は木更津保線・館山保線や駅と乗務員をいれた新たな「木更津地域分会」。成田保線・大網保線で「一つの分会」の再編案があった。

8月30日(火)に開催された千葉工務協常任委員会で千葉工務協組織人員は現在49名であり、3年後は18名、5年後は7名となり、ここで提案通り再編しても、先行きはまた再編しなければならず、「現実的ではない」となり、新小岩保線分会は今後、保線・土木・建築・電気を統合した「千葉設備分会」設立に向けて進めていくこととした。

お詫び

No.31号新保ニュース2021年11月29日付で「賃金制度である『号俸』は、JR東日本発足と同時に誕生」と載っていましたが、『号俸』は国鉄からJRに引き継いだ賃金制度です。遅くなりましたが深くお詫びします。